語りの文化差に関する検討——複数の予備的調査結果を踏まえて

上原泉

はじめに

認知のあり方、感じ方はもちろんのこと、言語使用を含む社会的行動の基本的な部分の多くは人類で共通している。この点は、比較心理学や進化心理学の研究知見と照らしあわせても納得がいくだろう。しかし、個人差があるうえ、人は集団の中で、集団のルールや慣習のもと社会生活を営んでいるため、周囲をとりまく環境や人、その集団内で形成される文化からの影響も無視できない。

本論文では、文化と行動、その中でも特に、語りとの関係性に焦点をあて、文化の違いによって語り方にどのような差が生じうるのかを、複数の調査結果を紹介しながら検討していく。最初に、文化と心理・行動の関係性についての本論文の立場を述べておく。

従来、文化が一方的に個人の行動や心を規定しているかのようにとらえられてきたが、近年、個人による文化の生成という側面に注意が向けられるようになり（Levine, Logoff, Rapport, Gjerde, Azuma）、文化には個人文化という側面と、文化的経験の共有によって形成される集団文化という側面が存在すると考えられるようになった。個人文化と集団文化の関係については、以下のようにまとめられる（東、二〇〇三；Azuma, 2006参照）。個人は、多様な文化をあわせもつ形で、自分独自の文化環境を有し、その個人の集まりである集団の文化は、流動的で固定化されたものとはなりえないため、集団文化の特徴を把握するのは容易ではない。異なる集団文化間の差異を検討することはさらに難しいといってよいだろう。とはいえ、個人が幼少期から長期にわたり同じ集団文化内で生活していれば、所属集団内で共有されるような、どうふるまい、評価し、理解するのがよいかに関する認知的枠組、すなわち、日常的な出来事や事柄に関する常識的な筋書き的知識（ライフ・スクリプト）を身につけていくと考えられる。集団文化自体が固定化されていないため、ライフ・スクリプトも変化していくものと思われるが、集団内で生活していくうえでの規範的なものとして機能しているため、劇的に変化するとは考えられず、その変化は徐々にすすむものと思われる。一般的によくいわれる、行動や心理面でみられる文化差は、集団間のライフ・スクリプトの差異として現れるのではないか、すなわち、異なる集団文化間では、そのスクリプトの分布や内容に差があるため、ときとして、同じ出来事に対する解釈や感じ方、対処の仕方等で違いが生じるのではないかというのが、本論文

の考え方である。

次に、文化を心理学で追究する上での、理論と実証の関係についての本論文の立場を述べておきたい。文化にはあまりにも多くの要素が含まれるため、それらを説明するための理論のレベルやタイプはいろいろあり得るが、心理学における文化研究の現状は、多くの文化的知見・事象の説明のよりどころとなるような理論があるとはいいがたく、文化的事象に関する（偏った見方や解釈を払拭するだけの）実証的なデータも充分ではないといってよいだろう。

そのような状況においては，文化のどの部分を追究するのかを明確に焦点化し、地道に調査を積み重ねていくという方法が賢明ではないかと考えている。研究の進め方として、既存の理論あるいは（自ら提唱する）新理論を検証するような調査・実験を行っていくという方法もあるが、今述べたとおり、文化差に関して、確固たる理論があるとはいえない混沌とした状況では、無理に理論に固執することなく、データ収集とその結果に対する説得力のある解釈を提示していく、という作業の積み重ねが必要ではないかと考える。時間はかかるだろうが、調査結果を積み重ねていきながら理論を形成していくという方法が、より誤解のない客観的な知見提供へとつながっていくのではないかと思われる。

文化差に関しては、依然として「西洋文化 vs 東洋文化」という二分法的な視点、さらに「西洋＝個人主義、東洋＝集団主義」（当該研究分野ではそのような見方は少なくなったが）という見方が強い。しかし、近年の知見から、諸文化をこのような単純な図式では決して把握しきれないこと、同じ〝東洋文化圏〟といわれる文化間にもさまざまな差があること、どの文化も、その文化なりの個人主義的部分、集団的主義的部分の双方を持ちあわせていることなどが示されてきている（増田・山岸、二〇一〇；高野・纓坂、一九九七；山本、二〇〇八他）。この流れを受け、本論文でも、文化差の調査を実施する際に、二分法的な対極的な比較を避けるため、三文化間（以上）での比較、さらに、同一文化圏内の比較（国内比較）や性差、世代差もあわせて調査することが必要だとの立場をとる。とはいえ、筆者が関わった調査のうち、三文化間比較を行えたのは、一部の調査のみで、二文化のデータしか得られなかった調査もある。二文化間比較のデータの解釈には、対極的な比較になりすぎないよう注意したつもりである。

以上のような立場、考えのもと、以下では、過去に筆者が関わった、語りと他関連事象の文化差に関する調査結果を中心に紹介していく。なお、語りに注目するのは、語りには、人が経験や行為をどうとらえ、どう意味づけているかが現れており（Bruner, 1990）、そのような語りは、幼少期からの社会生活の中で身につけ蓄積してきた文化的なライフ・スクリプトに基づき生成されると考えられるからである（東、二〇〇七）。

自己についての語りと文化差

本章では、自己についての語りに関する文化差を検討した調査結果をみていく。日本、中国、米国の大学生を対象に、向田・東（二〇〇七）、Mukaida, Azuma, Crane, & Crystal (2010) は、自

分の将来の一時点において自分がどうなっているかを予想させる作文課題を、高崎・東（二〇〇七）は、過去に行った目標志向的な努力について書かせる作文課題を実施している。これらの調査結果の概要を順に紹介したい。

向田・東（二〇〇七）、Mukaidaら（2010）では、「十年後のある一日」の生活について、行動、内面を含め詳しく書くようもとめている。その結果、「情景描写」や「日常生活」に関する記述の割合は、日本、中国の学生より米国の学生において有意に高く、仕事への言及は三つの国においてもっとも多かったという。しかし、「仕事上の具体的な行動」は中国の学生がもっとも高い割合で言及し、日本の学生での言及の割合がもっとも低かったという。「具体的な職業」への言及は、日本の女子学生で顕著に低いため、日本人学生全体での言及率も有意に低くなっていたという。「家族に関する記述」は米国の学生でもっとも多くみられ性差はなく、中国の学生では言及の割合が低く性差もなかったが、日本の学生においては性差があり男性よりも女性で有意に多く述べており、しかも、「家庭と仕事の両立」に言及していたのは、日本の女子学生のみであったという。「一生懸命」「頑張っている」といった、前向きで意欲的な行動スタイルの記述は、中国において半数近くともっとも多く、「肯定的感情」の記述は、中国、米国の学生が七割以上と比較的高かったのに対し、日本の学生の記述の割合は、半数程度と低かったという。国別の物語の傾向として、日本の学生の記述は、性差が著しく伝統的な性役割観が反映されており、具体的な行動より役割や立場への言及が多かったという。中国の学生の記述は、男女問わず、仕事面での記述が多く具体的であり、否定的な部分も言及されるが前向きな姿勢が伝わる物語になっていたという。米国の学生の記述は具体的で、仕事より家族関係の記述が特に詳しく対人関係を強調する物語であり、否定的な要素がなく、ハッピーエンド的な描かれ方だったという。一般的には、東洋文化圏で、より対人関係を重視するイメージを持たれがちだが、作文結果は逆になっている点は興味深い。この結果について、向田・東（二〇〇七）は、今後の追究が必要だとしながら「他者と切り離されていることが前提となっている社会では、あえて人とのつながりを強調する必要があるのかもしれない」（二二頁）と述べている。物語が具体的で性差が少ないという点で中国と米国の学生で共通しているなど、「西洋文化ｖｓ東洋文化」という枠組みではこの調査結果はうまく解釈できないことがわかる。

高崎・東（二〇〇七）では、ここ一、二年以内に（中国では「一年以内に」、米国では「数カ月以内に」と教示）目的を達成するために一生懸命努力したことについて詳しく記述するようもとめている。その結果、内容面では、「学業」についての記述は米国の学生より日中の学生のほうが有意に多く、全体的に少ないとはいえ、「進路」に関する記述は中国の学生において日米の学生より有意に多く、「対人関係」と「他の人のため」という記述は、米国の学生において日中の学生よりも有意に多かったという。何のために努力したかについては、日本の学生において「達成／競争」の記述が中米より有意に多く、米国の学生では「内発的」への言及が、中国の学生では「報酬／罰」への言及が他二国の学生よりも有意に多かったという。「目標の明確な記述」は日本の学生において有意に多かったが、「結果に関

する記述」や「結果に対する気持ち」は米国の学生において有意に多く、「プロセス（手段、努力中の気持ち）」の詳細は日中で異なる部分があるとはいえ、「プロセス」については、日中の学生のほうが米国の学生よりも有意に多く言及していたという。数量化三類の分析結果も踏まえ、国別の物語の傾向を以下のようにまとめている。日本の学生では、学業の達成を目的としたものが多く、目的の記述とプロセスの記述は明確だが、結果の記述が曖昧な傾向にあり、中国の学生では、目標の記述は曖昧だが日本と同様にプロセスに関する記述が多い傾向にあるものの、「報酬／罰」を目的に努力したとする記述が他二国の学生よりも多かったという。米国の学生では、「身の回り／生活」面で「内発的に」努力したと書く傾向がみられ、「結果に関する記述」が明確であったという。結果の記述を重視する米国とは異なり、努力プロセスを重視する傾向が、日中で共通しているようにみうけられるが、努力内容や目標などの記述では日中間で差異がみられ、この結果も、「西洋文化 vs 東洋文化」という単純な枠組みでは説明しきれないことを示している。しかも、語りのスタイルが、高崎・東（二〇〇七）の過去の努力の記述では日中で似ている部分があるものの（結果よりプロセスを詳しく語るスタイル）、向田・東（二〇〇七）の将来の自分に関する記述では、内容は大きく異なるとはいえ、むしろ中米で似ている部分がある（明るい未来を具体的に語るスタイル）ことが示され、語る内容によって、文化差の現れ方が異なってくる可能性を示唆しており、一文化圏内にも多様な要素が含まれ、各文化圏を単純には特徴づけられないことがわかる。

次に、日本、中国、米国の三国間比較ではないが、本研究室で日本とブラジルの学生を対象に行われた、自己紹介に関する予備的調査について方法も含め少し詳しく紹介したい[1]。この調査では、東京都内の一大学の日本人学生七一人（男子学生一四人、女子学生五七人）、ブラジル人学生二五人（男子学生一一人、女子学生一四人）を対象に[2]、「今、あなたが新しい学校（大学、専門学校など）に入学したと想像してください。そして初めてクラスの皆に会って自己紹介をする場面を想定してください。その時、あなたはどのように自己紹介をしますか？　五行以上で書いてください」と、簡単な自己紹介の記述をもとめる質問紙調査を実施した。分析に際し、コーディングカテゴリーを作成し、そのカテゴリーに基づき、調査者と別のコーディング者が独立に、記述内容を分類したところ、分類判定が九六％一致することが確認され、一致しなかった部分については話し合いで判定を行った。その結果について、まず、二国間で有意差のみられた項目をみていく。「やあどうも」といった挨拶を記述した割合は、日本人学生（一・四％）よりもブラジル人学生（六八・〇％）で有意に高かったが（$\chi^2(1, N=96)=53.82, p<.01$）、「こんにちは」と記述した割合は、ブラジル人学生（4.0％）よりも日本人学生（二三・九％）で有意に高かった（$\chi^2(1, N=96)=4.83, p<.05$）。「元気？」という呼びかけ」の記述は、日本人学生（一・四％）よりもブラジル人学生（二〇・〇％）で有意に高かった（$\chi^2(1, N=96)=53.82, p<.01$）。「会えて嬉しい」といった記述は日本人学生ではみられなかったが、ブラジル人学生（一二・〇％）でみられた（$\chi^2(1, N=96)=8.80, p<.01$）。「出身地」の記述は、ブラジル人学生（四〇・〇％）より日本人学生（八四・五％）で有意に多くみられたが（$\chi^2(1,$

N=96)=18.55, p <.01)、「現在住んでいる場所」の記述は、日本人学生（一一・三％）よりブラジル人学生（三二・〇％）で有意に多くみられた（χ^2(1, N=96)=5.72, p <.05)。「趣味・特技」への言及は、ブラジル人学生（三六・五％）より日本人学生（七六・一％）において有意に多かった（χ^2(1, N=96)=13.15, p <.01)。「現在の学校・仕事関係」の記述の割合は、日本人（一六・九％）よりブラジル人（六〇・〇％）で有意に高かった（χ^2(1, N=96)=17.00, p <.01)。「過去の部活」に関する記述は、ブラジル人学生ではなかったが、日本人学生では二割強（二一・一％）みられた（χ^2(1, N=96)=6.26, p <.05)。「年齢」の記述は日本人学生（五・六％）では少なかったが、ブラジル人学生では4割強（四四・〇％）みられた（χ^2(1, N=96)=20.64, p <.01)。日本での定番の文言といえる「よろしくお願いします」という記述はブラジル人学生ではなかったが、九割近くの日本人学生（八七・三％）でみられた（χ^2(1, N=96)=61.64, p <.01)。「聴衆に年齢や出身などを尋ねる」記述は、ブラジル人学生（四四・四％）でのみみられた（χ^2(1, N=96)=35.28, p <.01)。

なお、有意差がなかった記述カテゴリーは、「名前を述べる」（ブラジル人学生一人を除く全員、χ^2(1, N=96)=2.87)、「初めまして」（日本三二％、ブラジル二〇％、χ^2(1, N=96)=1.38)、「ありがとう」（日本一・四％、ブラジル四・〇％、χ^2(1, N=96)=0.61)、「通学手段」（日本二・八％、ブラジル四・〇％、χ^2(1, N=96)=0.09)、「過去の学校・仕事」（日本一六・九％、ブラジル二四・〇％、χ^2(1, N=96)=0.61)、「未来の学校・仕事」（日本人二一・一％、ブラジル人二四・〇％、χ^2(1, N=96)=0.09)、「現在の部活」（日本七・〇％、ブラジル〇％、χ^2(1, N=96)=1.86)、「未来の部活」（日本一一・三％、ブラジル〇％、χ^2(1, N=96)=3.07)、「性格・特徴」（日本一四・一％、ブラジル二〇・〇％、χ^2(1, N=96)=0.49)、「仲良くしてください、声かけてください」（日本三五・二％、ブラジル二〇・〇％、χ^2(1, N=96)=1.99）であった。

同じ自己紹介といっても、日本とブラジルで違いがあることが示されている。簡潔にまとめると、聴衆者に話しかけるような語り（聴衆者への挨拶や質問）がブラジル人学生で多くみられ、「出身地」や「過去の部活」（いずれも過去の自分）、趣味や特技への言及は日本人学生で多く、「現在の学校や仕事関係」、「現在住んでいる場所」については、ブラジル人学生のほうが多く言及していた。一見すると、日本人学生の自己紹介の内容は、日本の履歴書で記述がもとめられる内容と一致しているようにみうけられる。就職や応募時などにもとめられる、履歴書に書くべき内容に、文化的差異がみられる可能性を示唆しており、興味深い。一方、ブラジルでは、一方的に自分について語るスタイルではなく、聴衆に質問を投げかけたり、自分に質問したいことをきくよう促すなど、より双方向的に自己紹介が行われる可能性が示された点に注目している。ブラジル人学生内で共通する、自己についての語りのパターンが見出されたとはいえ、調査後に若干よせられたコメント等から判断すると、そもそも、クラス、集団メンバー同士が初対面のときに、定番の自己紹介を行うという習慣は日本で顕著である可能性が高く、自己を語るとなったときに、自己のどのような側面を語るのかについては、他の課題でも検討していく必要があると思われる。

以上、三種類の調査結果を紹介した。三文化間比較により、相違ばかりが目立つことになる二文化間比較で陥りやすい二

極対立的な解釈を避けることができ、それぞれの文化に複数の要素が含まれること、文化間（日中間、中米間、日中米の三国間など）で共通する部分もあること、が把握されやすいことがわかる。三つ目の調査結果は、データ数が少ない上、調査内容が非常に限られていたため、この結果からだけでいえることは少ないが、従来、ほとんど比較対象として追究されてこなかったブラジルと日本の学生間の差や共通する部分を少しでも示唆できたことは、今後の文化研究にとって貴重な参考資料となるだろう。一般的な自己観を探る調査として、「二十の私」テスト（特に文脈を設定せずに対象者に「私は＿＿＿＿＿＿です」を提示し、＿＿＿＿＿＿部分に自由に文章を書かせる課題）が複数の文化圏を対象に、過去実施されているが、欧米人よりも、中国、日本など東アジア圏で、社会的属性や役割を記述する割合が高いという知見（Triandis, McCusker, & Hui, 1990; Bond & Cheung, 1983 他）が知られている。前述の、将来の自己記述の調査や自己紹介の調査において、まさに、日本人学生が属性や役割を記述する割合が高かった点は、この過去の知見に共通している。ただし、同じ東アジアとはいえ、日中で自己観やその表出法がかなり似通っているかというとそうではないことも、前述の二調査から明らかであり、「自己についての語り」の文化差を把握するには、今後さまざまな課題、方法により、多くの文化圏のデータを蓄積していく必要があるだろう。

物語の人物記述に関する文化差―日中米比較研究の中間報告

本章では、物語の人物記述の際、どのような点を重視するかに関する文化差を検討した調査について、方法も含め詳しく紹介する。

上原・東は初期の調査分析で（上原・東、二〇〇七）、日本、中国、米国の学生を対象に、物語の主人公に関する情報で重視する項目を評定させた後、偏った評定項目を除いて因子分析を行い[3]、三国間で共通する因子構造（三因子：「プロフィール・履歴書」因子、「成功者」因子、「近親者との関係」因子）を見出し、因子得点による差の有無を検討した。その結果、「プロフィール・履歴書」因子得点は日本において中国・米国より有意に高く、「成功者」因子得点は日本・中国が米国より有意に高いことを見出した。各項目レベルの分析でも、日本の学生はプロフィール的な情報を重視し、中国の学生は、皆に評価されるような前向きな人物像を重視する傾向が強いことを見出している。

その後の調査で、データ数が非常に少なかった米国人大学生のデータを多数追加することができたため、分析法を見直し、新たな分析を行った（上原・東・Crane、発表準備中）。その分析結果の詳細を、調査方法とあわせて以下で紹介する。

調査では、日本人大学生二三五人（男子学生一〇二人、女子学生一三三人、平均年齢一九・七歳）、中国人大学生八一人（男子学生四〇人、女子学生四一人、平均年齢二〇・九歳）、米国人大学生一六八名（男子学生九五人、女子学生七三人、平均年齢一九・〇歳）[4]を対象に、「物語を作成するのに、主人公の特徴

として示した三二の情報がどれくらい重要だと思うか」を三段階（一：重要でない。二：どちらともいえない。三：重要である。）で評定させ、さらに、三二項目のうち物語作成のために特に重要だと思われる五項目を選択させた。本分析では、特に評定値に偏りのある項目を除くことはせず、そもそも三国間で因子構造自体が異なる可能性を想定し、三国のデータで独立に因子分析を行った（主因子法、スクリープロットにより因子数を決定（各因子の固有値はいずれも1より大きい）、プロマックス回転）。分析過程は以下のとおりである。共通性が〇・一六，因子負荷が〇・三五に満たない項目を削除し、因子負荷が一つの因子について〇・三五以上で、かつ二因子にまたがって〇・三五以上の負荷を示さない項目を各国データにおいて選出することにした[5]。最終的に、日本データでは十五項目、中国データでは十三項目、米国データでは十八項目が選出された。

因子分析の結果、三国間で異なる因子構造が存在する可能性が示唆された。日本のデータからは四因子が抽出された（累積寄与率五二％、表1参照）。第一因子は、将来の希望や最近の入賞、最近の精神状況や部屋の状況、性質といった項目から構成されており、いずれも、現在の自分に関わる情報であるため「現在の自分」因子と命名した。第二因子は、生い立ち（過去の苦労や仕事の成功）、性格、結婚など、第一因子と似通った個人的な情報からなるが、第一因子の情報より、履歴書やプロフィールに記入されることの多い内容であるため「プロフィール」因子と命名した。第三因子は、収入の高さ、充分な貯金、優秀な学業成績といった項目から構成されているため「成功者」因子と命名した。第四因子は、家族、先祖に関する項目から構成されているため「親類との関係」因子と命名した。四つの因子間の相関を表2に示した。因子一と因子二の間に弱い正の相関関係がみとめられる。

中国のデータからは三因子が抽出された（累積寄与率四八％、表3参照）。第一因子は、夫の高い収入、充分な貯金、収入の高さ、若い外見、結婚といった項目から構成されているため「成功者」因子と命名した。第二因子は、家族、先祖、近所づきあい、夫との仲のよさに関する項目から成っているため「親類・近所との関係」因子と命名した。第三因子は、幼少期の

表1：因子負荷（日本）

質問項目	因子			
	因子1	因子2	因子3	因子4
28.将来の希望は本を出版することである。	0.72	0.06	−0.11	−0.74
24.最近、エッセイコンテストで入賞した。	0.70	−0.06	−0.10	−0.07
23. きまじめである。	0.40	0.05	0.15	0.05
30.ときどきひどくふさぎこむ。	0.39	−0.11	0.20	0.05
11.掃除をあまりしないので部屋は散らかっている。	0.38	0.18	0.09	0.08
2. 友だちに人気がある。	−0.17	0.70	−0.18	0.00
6.子どもの時父親が亡くなり経済的に苦労した。	0.17	0.50	−0.07	0.14
21.仕事で成功した。	−0.03	0.50	0.34	−0.12
5.人から注目されるのが好きである.	0.18	0.43	0.00	−0.06
8.結婚している。	0.00	0.39	−0.05	0.11
13.収入は同年齢の人の中では上位である。	−0.03	0.20	0.64	−0.05
31.充分な貯金を持っている。	−0.02	−0.16	0.62	0.02
19.学校の成績は上位であった。	0.08	−0.16	0.60	0.08
12.先祖の墓参りや法事は大切だと考える。	0.00	0.03	−0.02	0.81
16.お正月には家族が集まる必要があると考える。	−0.04	0.07	0.07	0.53

表2：因子間の相関係数（日本）

因子	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1	1.00			
因子2	0.31	1.00		
因子3	0.13	0.17	1.00	
因子4	0.20	0.00	0.12	1.00

苦労に関する項目も含むが、仕事内容に関わっているため「仕事」因子と命名した。三つの因子間の相関を表4に示した。米国のデータからも三因子が抽出された。因子数は中国と共通するが、その内容はむしろ日本の構造に似ていた（累積寄与率四五％、表5参照）。第一因子は、結婚、趣味、最近の精神状況、性質、生い立ちなどの項目からなっているため「履歴書・プロフィール」因子と命名した。第二因子は、収入の高さ、充分な貯金、若い外見、夫の高い収入、優秀な学業成績に関する項目から成るため、「成功者」因子と命名した。第三因子は、夫との仲のよさ、家族、近所づきあい、生き方や将来への希望に関する項目から成っているため、「親類・近所との関係や生き方」因子と命名した。三つの因子間の相関を表6に示した。因子一と因子二の間、因子二と因子三の間に、弱い正の相関関係がみとめられる。

この因子分析結果から何が読み取れるか。見出された因子自体は、三国間で大きく異なっているわけではない。「成功者」因子と「親類（近所）との関係」因子は、構成する項目内容が少し異なっているものの、三国で共通して抽出された。しかし、物語の主人公に関する情報を評価する際の視点が、三国間で若干の違いがある可能性も読み取れる。中国においてのみ、日本・米国と異なり、「プロフィール・履歴書」に関わる情報が因子として抽出されず、「仕事」因子が抽出された。プロフィール情報、日常的な情報といった視点が希薄な可能性が高い。日本では、第一因子、第二因子のいずれもが「プロフィール・履歴書」に関わってくるような情報であり、米国では、親類、近所とのつきあいに関する項目と生きる姿勢に関する項目が一緒に第三因子を形成していた点が注目に値する。

実際にどのような項目が各国で重視されているのか詳細を検討するため、三二項目それぞれの三国での評定のされ方と、三二項目のうち物語作成のために特に重要だと思われる五項目を選択させた結果について順にみていく。

まず、三二項目に対する評定結果であるが、各国での項目ごとの評定の比率と有意差について記した表7にあるとおり、項目七、一八、二〇、二一、二九の五項目を除く二七項目で、評定の仕方に国間で有意差があることがわかる。日本では、項

表3：因子負荷（中国）

質問項目	因子		
	因子1	因子2	因子3
15.夫には充分な収入がある。	0.74	0.06	−0.11
13.収入は同年齢の人の中では上位である。	0.70	0.09	−0.16
31.充分な貯金を持っている。	0.67	−0.12	0.31
14.実際の年齢より若く見える。	0.63	−0.04	0.10
8.結婚している。	0.46	−0.16	−0.22
16.お正月には家族が集まる必要があると考える。	−0.01	0.69	−0.23
12.先祖の墓参りや法事は大切だと考える。	−0.13	0.42	0.23
20.近所づきあいを大切にしている。	−0.06	0.42	0.21
18.夫と仲がよい。	0.27	0.40	−0.08
21.仕事で成功した。	0.18	0.30	0.58
9.IT関連の仕事にたずさわっている。	0.05	−0.18	0.41
28.将来の希望は本を出版することである。	−0.19	0.14	0.38
6.子どもの時父親が亡くなり経済的に苦労した。	−0.17	0.05	0.33

表4：因子間の相関係数（中国）

因子	因子1	因子2	因子3
因子1	1.00		
因子2	0.18	1.00	
因子3	0.15	−0.18	1.00

目四（絵を描くのが趣味）、項目五（人から注目されるのが好き）、項目八（結婚している）、項目一一（掃除をあまりしないので部屋が散らかっている）、項目一三（収入が同年齢の中では上位である）、項目二二（小型の犬を飼っている）、項目二四（最近、エッセイコンテストで入賞した）、項目二七（夫は高校の同級生だった）、項目二八（将来の希望は本の出版）、項目三〇（ときどきひどくふさぎこむ）など、趣味や性質などのプロフィール的情報や、より日常的な内容が、中国、米国より有意に重視されたが、米国では、このようなプロフィール的情報は軽視される傾向にあった（項目一一、項目一五、項目二二、項目二四、項目二七の評定は有意に低かった）。一部の個人的情報、例えば、項目九（ＩＴ関連の仕事にたずさわる）、項目一四（実際の年齢より若くみえる）、項目一五（夫には充分な収入がある）、項目一九（学校の成績は上位であった）、項目三二（充分な貯金を持っている）は、日本と中国でともに、米国よりも有意に重視する傾向にあった。プロフィール的情報の重要度評定は、中国は、日本と米国の中間にあるといった印象を受けるが、性質や日常的な内容は中国での評定は米国と同様に低いため、因子分析結果とあわせて考慮すると、個人的情報のとらえ方が日本と中国で質的に異なる可能性は高い。なお、項目二六（平凡に暮らすのがよいと思っている）は日本で有意に評定が高く、米国で有意に評定が低かった点も興味深い。

表5：因子負荷（米国）

質問項目	因子		
	因子1	因子2	因子3
8.結婚している。	0.70	−0.02	0.19
30.ときどきひどくふさぎこむ。	0.63	−0.11	−0.12
4.絵を書くのが趣味である。	0.57	−0.07	−0.01
23.きまじめである。	0.56	−0.07	−0.14
5.人から注目されるのが好きである	0.50	0.17	−0.11
9.IT関連の仕事にたずさわっている。	0.49	0.09	0.06
6.子どもの時父親が亡くなり経済的に苦労した。	0.47	0.04	−0.15
27.夫は高校の同級生だった。	0.41	0.07	0.15
13.収入は同年齢の人の中では上位である	0.09	0.70	−0.12
31.充分な貯金を持っている	−0.04	0.58	0.10
14.実際の年齢より若く見える	0.03	0.57	−0.14
15.夫には充分な収入がある	0.11	0.56	0.12
19.学校の成績は上位であった	−0.16	0.46	0.07
18.夫と仲がよい。	0.33	−0.11	0.64
16.お正月には家族が集まる必要があると考える。	−0.00	0.18	0.61
20.近所づきあいを大切にする。	−0.16	−0.14	0.53
29.一生懸命していれば、いつかいいことがある。	−0.04	0.01	0.48
25.将来に希望をもっている。	−0.27	0.09	0.45

表6：因子間の相関係数（米国）

因子	因子1	因子2	因子3
因子1	1.00		
因子2	0.33	1.00	
因子3	0.05	0.28	1.00

表7：32項目に対する評定の比率
（1：重要ではない、2：どちらともいえない、3：重要である）

項目内容 ＼ 評定値	日本			中国			米国			χ^2値
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
1.健康に注意している	31.9%*	37.9%	30.2%	7.4%**	30.9%*	61.7%**	27.1%	51.2%**	19%**	52.6**
2.友だちに人気がある	13.2%	20.4%**	66.4%**	3.7%**	17.3%*	79.0%**	18.5%*	45.2%**	36.3%**	56.9**
3.毎晩その日の仕事の反省をする	33.2%*	30.2%**	36.6%	27.2%	35.8%	37.0%	22.0%*	44.0%**	33.9%	9.8*
4.絵を描くのが趣味である	24.7%**	27.7%	47.7%**	48.1%*	32.1%	19.8%**	51.8%**	32.7%	15.5%**	58.9**
5.人から注目されるのが好き	20.4%**	23.8%**	55.7%**	30.9%	40.7%*	28.4%*	39.3%**	36.3%	24.4%**	47.5**
6.子どもの時父を亡くし経済的に苦労	18.3%*	17.4%**	64.3%**	38.3%**	32.1%	29.6%**	20.8%	37.5%**	41.7%**	45.0**
7.先週末優にレストランでサインもら	69.4%	19.1%	11.5%	77.8%	21.0%	1.2%	74.4%	17.9%	7.7%	8.6
8.結婚している	14.5%**	23.8%**	61.7%**	30.9%	33.3%	35.8%*	33.3%**	38.1%**	28.6%**	49.2**
9.IT関連の仕事にたずさわる	34.5%**	36.6%	28.9%**	37.0%	37.0%	25.6%	51.8%**	33.9%	14.3%**	17.1**
10.数人の視友がいる	8.5%	24.3%*	67.2%**	8.6%	18.5%*	72.8%*	11.9%	40.5%**	47.6%**	22.1**
11.掃除をあまりせず部屋は散らかって	26.0%**	36.2%	37.9%**	35.8%	38.3%	25.9%	50.6%**	38.1%	11.3%**	42.5**
12.先祖のお墓参りや法事は大切	40.4%	30.2%	29.4%	53.1%**	33.3%	13.6%**	28.0%**	39.3%	32.7%	19.5**
13.収入は同年齢の人の中で上位	23.8%	32.3%**	43.8%**	19.8%	51.9%*	28.4%	32.1%*	42.9%	25.0%**	21.9**
14.実際の年齢より若くみえる	19.6%*	29.8%*	50.6%**	17.3%	34.6%	48.1%	34.5%**	40.5%	25.0%**	30.9**
15.夫には充分な収入がある	24.3%**	42.6%	33.2%**	37.0%	37.0%	25.9%	48.8%**	41.7%	9.5%**	40.8**
16.お正月には家族が集まる必要がある	38.3%**	33.6%	28.1%**	12.3%	32.1%	55.6%**	23.2%	39.9%	36.9%	31.1**
17.しっかり目標をたて人生を自分で開く	6.8%	17.4%	75.7%	2.5%	12.3%	85.2%*	5.4%	25.6%*	69.0%*	9.8*
18.夫と仲がよい	12.3%	21.7%	66.0%	9.9%	24.7%	65.4%	13.1%	25.0%	61.9%	1.3
19.学校の成績は上位であった	37.9%	34.9%	27.2%**	28.4%**	49.4%*	22.2%	51.8%**	33.9%	14.3%**	20.0**
20.近所づきあいを大切にしている	23.4%	37.0%	39.6%	14.8%	44.4%	40.7%	19.0%	47.6%	33.3%	6.5
21.仕事で成功した	14.0%	25.5%	60.4%	4.9%	34.6%	60.5%	7.7%	32.7%	59.5%	9.1
22.小型の犬を飼っている	36.6%**	30.6%*	32.8%**	58.0%	23.5%	18.5%	73.8%**	19.6%*	6.5%**	62.8**
23.きまじめである	14.5%**	31.1%	54.5%**	1.2%**	29.6%	69.1%**	41.1%**	35.1%	23.8%**	82.4**
24.最近エッセイコンテストで入賞	40.4**%	31.9%	27.7%**	49.4%	39.5%*	11.1%	76.2%**	19.0%**	4.8%**	65.4**
25.将来に希望をもっている	10.2%*	18.3%*	71.5%	1.2%*	12.3%*	86.4%**	7.1%	34.5%**	58.3%**	28.9**
26.平凡に暮らすのがよいと思っている	19.6%*	32.8%*	47.7%**	19.8%	44.4%	35.8%	32.7%**	42.9%	24.4%**	25.6**
27.夫は高校の同級生だった	42.6%**	30.6%	26.8%**	51.9%	33.3%	14.8%	56.0%*	36.3%	7.7%**	25.0**
28.将来の希望は本の出版	26.4%	28.9%**	44.7%**	32.1%	45.7%	22.2%*	29.2%	48.8%**	22.0%**	30.7**
29.一生懸命していればいつかいいことが	11.1%	24.7%	64.3%	9.9%	22.2%	67.9%	7.7%	29.2%	63.1%	2.6
30.ときどきひどくふさぎこむ	11.5%**	24.3%**	64.3%**	12.3%	43.2%**	44.4%	26.2%**	34.5%	39.3%**	34.6**
31.充分な貯金を持っている	34.5%	37.0%*	28.5%*	33.3%	38.3%	28.4%	32.1%	53.0%**	14.9%**	15.0**
32.くじで10万円あたった	67.2%	20.4%	12.3%	79.0%*	17.3%	3.7%*	61.3%*	29.8%*	8.9%	12.5*

* χ^2値、残差分析において、$p < .05$は*、$p < .01$は**

中国において、項目一（健康に注意している）、項目二（友だちに人気がある）（米国が一番有意に低い）、項目一〇（数人の親友がいる）（米国が一番有意に低い）、項目一六（お正月には家族が集まる必要がある）（日本が一番有意に低い）、項目一七（しっかり目標をたてて、人生を自分できりひらいていきたいと思っている）、項目二三（きまじめである）（米国が一番有意に低い）、項目二五（将来に希望をもっている）（米国が一番有意に低い）といった、人間関係を大切にして積極的に生きる姿勢に関わる項目の評定値が、有意に日本、米国より高い傾向にあった。ただし、項目一二（先祖の墓参りや法事は大切であるとの考え）が中国で日本、米国より有意に評定が低かった点（日本と米国では同程度に評定）は注目に値する。

米国においてのみ、日本、中国より有意に重視されている項目はなかった。日本、中国より有意に評定が低かった項目として、友だちづきあいや夫の個人情報に関する項目（項目二、項目一〇、項目一五、項目二七）があげられる。また、項目九（ＩＴ関連の仕事にたずさわる）、項目二三（きまじめである）、項目三一（充分な貯金を持っている）も有意に日本、中国より評定が低かった。項目六（子どもの時父を亡くし経済的に苦労した）は日本についで米国が、中国より評定が有意に高く、項目一六（お正月には家族が集まる必要がある）が日本と中国の中間の評定であった。

次に、重要だと思われる五項目の選択結果についてみていく。項目ごとに、選択数をそれぞれの国の対象者数で割ってもとめた比率を図1に表した。前の項目ごとの評定結果では、プロフィール的、日常的情報の評定値が日本においてどれも高い傾向にあったが、選択数が5個と限られ、選択が分散されたためか、日本で中国、米国より目立って高く選択されている項目は少なかった。項目八（結婚している）は日本で中国・米国より突出して高く選択されていた（$\chi^2(2, N=484)=25.80, p<.01$）。ほか、日本での選択率も決して高くないとはいえ、中国、米国より有意に高く選択されていたのは、項目四（絵を描くのが趣味）（$\chi^2(2, N=484)=7.39, p<.05$）、項目二四（最近、エッセイコンテストで入賞した）（$\chi^2(2, N=484)=13.30, p<.01$）、項目二八（将来の希望は本の出版）（$\chi^2(2, N=484)=20.11, p<.01$）であった。項目一六（お正月には家族が集まる必要がある）は、項目ごとの評定と同様に、日本で中国、米国より有意に

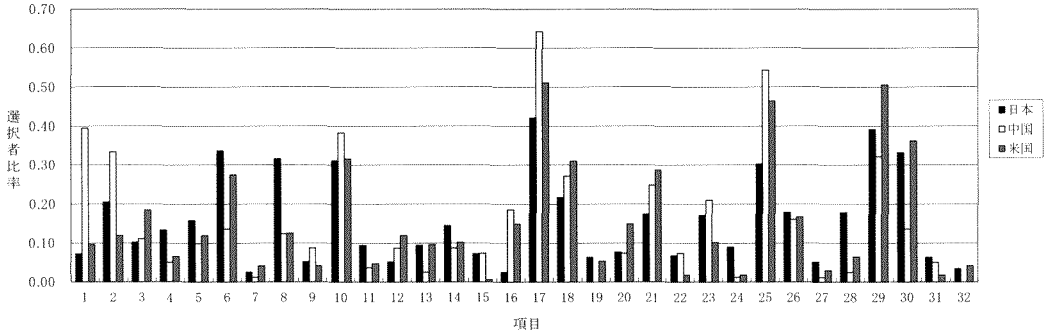

図1：5項目選択課題における選択者数の比率

低く選択されていた（$\chi^2(2, N=484)=26.50, p<.01$）。

中国では、項目ごとの評定結果と類似した傾向が五項目の選択行動にも反映されていた。日本、米国より、項目一（健康に注意している）（$\chi^2(2, N=484)=57.34, p<.01$）、項目二（友だちに人気がある）（$\chi^2(2, N=484)=16.09, p<.01$）、項目一七（しっかり目標をたてて、人生を自分できりひらいていきたいと思っている）（$\chi^2(2, N=484)=12.30, p<.01$）、項目二五（将来に希望をもっている）（$\chi^2(2, N=484)=19.21, p<.01$、日本の選択率が有意に一番低かった）が有意に高く選択されていた。

前述の項目ごとの評定結果ではみられなかった、米国での特徴が、五項目の選択の仕方では示された。日本、中国でも比較高い選択率であったが、日本、中国より米国で有意に高く選択されたのは項目二九（一生懸命していればいつかいいことがあると思っている）（$\chi^2(2, N=484)=7.39, p<.05$）であった。米国での選択率も高くはないとはいえ、日本、中国より有意に高く選択されていたのは、項目三（毎晩その日の仕事の反省をする）（$\chi^2(2, N=484)=7.39, p<.05$）であった。日本と同様に米国で、中国より有意に高く選択されていたのは、項目六（子どもの時父を亡くし経済的に苦労した）（$\chi^2(2, N=484)=12.04, p<.01$）と項目三〇（ときどきひどくふさぎこむ）（$\chi^2(2, N=484)=14.23, p<.01$）であった。一方、中国と同様に米国で、日本より有意に高く選択されていたのは、項目二一（仕事で成功した）（$\chi^2(2, N=484)=7.21, p<.01$）であった。

以上の結果をまとめると、物語作成の際に、日本、中国、米国の学生が重視する主人公の特徴に、国間でさまざまな類似点や違いがあることが示された。日本においては、趣味や性質、履歴などのプロフィール的情報や日常的な内容を重視する傾向が強いが、米国においては、逆に、プロフィール的な個人情報はほぼ重視されないことがわかった。ただし米国において、日本と同様に「子どもの時父を亡くし経済的に苦労した」「ときどきひどくふさぎこむ」といった内容は重視される傾向にあり、ほか、「毎晩仕事を反省する」「一生懸命していればいつかいいことがあると思っている」が少し重視の度合いが高い傾向にあった点は注目に値する。中国においては、「絵を描くのが趣味」と「将来の希望は本の出版」は米国と同様に評定が低いものの、一部の個人的情報は日本と同様に重視し、他のプロフィール的情報の多くは、日本と米国の中間的な評定値であった。ただし、これらのプロフィール的な情報は、日本や米国とは異なり、中国ではひとくくりの内容としてはとらえられていない可能性が示されており（日本と米国では因子として抽出されたが中国では抽出されなかった）、単純に、プロフィール的情報のとらえ方が、日本と米国の中間とはいいきれないように思われる。また、中国では、日本や米国と異なり、友人や家族との関係性、積極的に生きる姿勢に関わる項目を重視する傾向が強かった点は注目に値する。このようにみると、日本、中国、米国の反応の違いや類似度が一次元的に表現できるものではないこと、また、従来多くの分野で当たり前のようにとらえられてきた、「西洋ｖｓ東洋」という枠組みで今回の結果を単純には解釈できないことがわかる。一部の項目で、日本と中国で顕著に異なる特徴も示されている。項目レベルの評定値に基づき一見すると、特に個人的情報のとらえ方については、日本と米国の間に中国が位置するようにみえなくもないが、他の側面や

五項目の選択結果、因子分析結果をみると、日本と中国から、際立って米国がかけ離れているという結果では決してない。この結果は、文化差を論じるとき、多様な視点から考慮する必要があることを示唆していると思われる。

ただし、この調査結果から、日本、中国、米国の文化差を結論づけるのは尚早である。さらなる吟味が必要である。まず、原案が日本で作成されたこと、翻訳に際する項目内容の妥当性などの確認作業は、米国研究者（一名）とも行ったが、中国研究者（五名）との方が時間をかけて行ったことから、設定した項目自体が日本の特徴を反映したものになり、米国で重視されやすい項目が入らなかった可能性が考えられる。今後、項目自体の改良と、他の国も含めたデータの蓄積により、物語ることに関する文化差についての理解が深まると思われる。

いずれにせよ、先に、自己についての語りの調査として紹介した、日本、中国、米国の比較研究結果とは、また異なる三国の特徴も示されており、興味深い。先に紹介した、自己紹介のデータで、日本の学生が自己紹介のとき、過去の部活動や、趣味を述べる割合がブラジルの学生より高いことが示されているが、主人公に関する情報でも、中国、米国より、趣味を含むプロフィール情報を重視する傾向が強いことが示され、このような情報を重視する（あるいはこのような情報に注意を向ける）ライフ・スクリプトが日本人の間で共有されている可能性は高いと思われる。

どのような物語・主人公に興味や共感を覚えるか？――日米差に関する予備的検討

直前に紹介した調査は、物語作成の際に主人公のどのような側面を重視するかに焦点をおいていたが、ここでは、どのような物語を好むかに焦点をおいて実施した、日本と米国の比較調査の中間報告（上原・東・Crane、発表準備中）を紹介したい。

この調査では、日本人大学生一二七人（男子学生二九人、女子学生九六人、性別不明二人、平均年齢一八・七歳、標準偏差〇・八三歳）と米国人大学生一〇九人（男子学生六三人、女子学生四六人、平均年齢一九・一歳、標準偏差〇・八七歳）を対象に質問紙課題を行った[6]。男女別の人数等の詳細は次のとおりであった。日本と米国あわせた（以下日米と称する）男子学生は九二人（平均年齢一九・〇歳、標準偏差〇・八一歳）、日米女子大学生は一四二人（平均年齢一八・八歳、標準偏差〇・八九歳）、日本人男子大学生は二九人（平均年齢一八・九歳、標準偏差〇・八二歳）、米国人男子大学生は六三人（平均年齢一九・〇歳、標準偏差〇・八一歳）、日本人女子大学生は九六人（平均年齢一八・七歳、標準偏差〇・八三歳）、米国人女子大学生は四六人（平均年齢一九・一歳、標準偏差〇・九四歳）であった。

質問紙には、ストーリーパターンが異なる4つの物語の概要が四、五行で記されており、最初に、その四つの物語に対して興味が感じられる順に1、2、3、4と順位づけ、次に、その同じ四つの物語に対して共感できる順に1、2、3、4と順位づけるよう対象者は教示された。四つの物語の概要は（文言を少し省略）、①主人公（女性）が両親を早くに亡くし精神的にも経

済的にもつらい幼少期を過ごしたが、必死に勉強してエリート大学に入り、卒業後は大学の先輩との結婚、有名企業での仕事経験を経て、夫と興した新しいビジネスで成功をおさめ大邸宅に住んでいる。②主人公（女性）は、小さい頃、花屋さんになりたいと思いながら平凡な生活をおくり、ピアノが得意でよく演奏していた。大学卒業後は仕事についたが出世は考えておらず、仕事後にスポーツジムや料理教室に通い、いつかいい人と出会いのんびりと彼と子どもと暮らせたらと思っている。③主人公（女性）は、大学卒業後、小さな印刷会社に就職し5年勤めた頃結婚し、出産を機に退職。夫とは友人の紹介で知り合い、夫は銀行の支店長である。子どもの手がかからなくなり、家族に内緒で、夜中にワープロで執筆を続け、昨日、密かにエッセイ・コンテストに応募した。④主人公（女性）は、広告業界で十年間ばりばりと仕事していたが結婚を機に退職。著名な弁護士の夫、子ども、犬と邸宅に暮らしよくホームパーティを開いていたが、夫の借金で離婚。その後、子どもが病にかかり治療代のため昼夜働く生活となったが、すべてがよい方向に向かうと信じている。であった。

まず、日本と米国のデータを別にして、興味の順位づけについて、四つの物語間で有意な差があるか検討したところ（平均順位と有意差の結果の詳細は表8を参照）、日本、米国でともに、有意差がみとめられた（フリードマン検定、日本：χ^2=18.8、米国：χ^2=27.6, p<.05）。多重比較（ボンフェローニ）を行ったところ、日本、米国いずれにおいても、物語②は、有意に他の三つの物語より興味の度合いは低いと判断されていたが、①③④の物語間の興味の度合いに有意差はみとめられなかった。同様に、共感の度合いの順位づけについて、各国で四つの物語間で検討したところ（平均順位と有意差の結果の詳細は表9を参照）、有意差がみとめられた（フリードマン検定、日本：χ^2=68.8、米国：χ^2=84.4, p<.05）。多重比較（ボンフェローニ）を行ったところ、日本では、物語②、③いずれもが、物語④、①よりも共感の度合いが有意に高いと判断されていたが、物語②と③の間、物語④と①の間では共感の度合いに有意差はみとめられなかった。米国では、有意に、物語②が一番共感をもたれ、次に物語③が共感をもたれ、①と④の間では共感の度合いに有意差はみとめられなかった。四つの物語に対する興味の度合いは、日米で同じであり、共感の度合いにおいてのみ若干異なる部分はあったが（日本では②と③の間で有意差はなかったが、米国では有意に②＞③であった）、類似する結果であった。

性差、性差と国の交互作用の有無をみるため、男女別、各国における男女別に、四つの物語間の興味の度合いと共感の度合いについて検討した（平均順位と有意差の結果の詳細は表8、表9を参照）。おおよその傾向は一致していたが、若干、有意差の出方に違いがみられた。まず、興味の度合いについてだが、日本人男子大学生と米国人女子大学において、四つの物語間で有意差がみられなかった。また、日本人女子大学生においては、物語②のランクが他の群と同様に一番低かったものの、物語③との有意差はみられなかった。次に、共感の度合いについてだが、日本人男子大学生では①のみが、②③よりも有意に共感の度合いが低いことが示された。一方、米国人女子大学生では、②が一番共感の度合いが有意に高く、④が一番共感の度合いが有意に低いものの、①と③の間で有意な差が認められなかっ

た。

表8：4つの物語に対する順序評定（興味の度合い）

属性	興味の度合い（平均ランク）				χ^2値	多重比較（Bonferoni、有意水準5%）					
	物語①	物語②	物語③	物語④		①と②	①と③	①と④	②と③	②と④	③と④
日本人大学生	2.35	**2.91**	2.46	2.28	18.8**	*			*	*	
米国人大学生	2.48	**3.00**	2.43	2.09	27.6**	*			*	*	
男子大学生（日米）	2.47	**3.07**	2.42	2.04	29.5**	*			*	*	
女子大学生（日米）	2.36	**2.89**	2.48	2.27	18.8**	*			*	*	
日本人大学生（男子）	2.59	2.90	2.28	2.24	4.9						
米国人大学生（男子）	2.41	**3.14**	2.49	1.95	27.3**	*			*	*	
日本人大学生（女子）	2.26	**2.93**	**2.54**	2.27	16.9**	*				*	
米国人大学生（女子）	2.57	2.80	2.35	2.28	4.6						

＊χ^2値(Friedman)においてp＜.05は*、p＜.01は**、多重比較で有意差がみられた箇所は*を記した。

表9：4つの物語に対する順序評定（共感の度合い）

属性	共感の度合い（平均ランク）				χ^2値	多重比較（Bonferoni、有意水準5%）					
	物語①	物語②	物語③	物語④		①と②	①と③	①と④	②と③	②と④	③と④
日本人大学生	3.01	1.88	2.20	2.91	68.8**	*	*			*	*
米国人大学生	2.87	1.69	2.28	3.17	84.3**	*	*		*	*	*
男子大学生（日米）	3.05	1.87	2.25	2.83	48.2**	*	*		*	*	*
女子大学生（日米）	2.87	1.74	2.23	3.17	105.2**	*	*		*	*	*
日本人大学生（男子）	**3.10**	2.07	2.24	2.59	10.9*	*	*				
米国人大学生（男子）	3.03	1.78	2.25	2.94	39.9**	*	*		*	*	*
日本人大学生（女子）	2.97	1.82	2.19	3.02	60.3**	*	*			*	*
米国人大学生（女子）	2.65	1.57	2.30	**3.48**	52.2**	*		*	*	*	*

＊χ^2値(Friedman)においてp＜.05は*、p＜.01は**、多重比較で有意差がみられた箇所は*を記した。

わかりやすくまとめると、日本、米国ともに、四つの物語の興味の度合いについては、一番日常的な内容（平凡な幸せをのぞむ）の②の物語が有意に低いという結果だったが、共感の度合いについては、逆に、一番日常的な内容（平凡な幸せをのぞむ）の②が一番、あるいは、②と、平凡だがささやかな夢を持つ③の物語がともに、①の立身出世物語や④の華やかな生活から辛い生活になった物語より有意に高かった。おおよその傾向は類似しているが、日本人男子大学生と米国人女子大学生で、若干異なる部分があった。興味の度合いでは、日本人男子大学生と米国人女子大学生ともに、四つの物語間のランクに有意差はみられなかった。共感の度合いでは、日本人男子大学生において、④と有意差はないものの①の立身出世物語のランクが一番低いという結果が示され、米国人女子大学生においては、日常的な内容の②のランクが有意に一番高く、④が有意に一番低いという結果であった。

先に紹介した、物語の主人公に関する情報の重要度評定の結果を考慮すると、日本人大学生における、より日常的な内容の②、平凡だがささやかな夢を持つ③の物語に対する興味や共感の度合いが、米国人の大学生より高いのではないかと推測されたが、そうではなかった。物語の主人公に関する情報の重要度評定と異なり、本調査で用意した物語間の興味の度合いや共感の度合いにおいて、日本と米国の大学生間でほぼ差がみられず、日米において、より日常的で平凡な生活の物語に対する興味の度合いは低いが、共感の度合いは高いという結果であった。用意した物語の問題で、他の種類の物語を用意すれば、日本と米国の差が明確に表れた可能性は考えられる。

とはいえ、この結果から、文化差とは、多方面で一様に存在するわけではないことが読み取れる。人気のある映画に、ときとして、文化差がある点を考慮すると、まったく、物語への興味や共感の度合いに文化差がないとは思われないが、インターネット等の進展により、世界各国のアニメ、映画、小説などが流通するようになり、特に若い世代を中心に、一昔前よりは、物語に対する嗜好差は、ある側面においては小さくなってきている可能性は充分考えられる。

この調査は、日本と米国の大学生しか対象にしておらず、他の文化圏での実施と、もう少し他の物語パターンを加えての検討が必要であると考える。

その他でみられる文化差—複数の予備的調査結果の紹介

上記では、自己の語り、物語の主人公についての語り、物語の嗜好に焦点をおいた文化間の違いを検討する調査を詳しく紹介してきたが、以下では、直接語りとは関わりのない内容での文化差に関する予備調査の結果について紹介していきたい。

まず、日本人に対するイメージを日本人と日本滞在中の外国籍の若者（以下、留学生と称する）を対象に行った調査結果を紹介する[7]。この調査では、東京都内の一大学の日本人大学生三七人（男子学生一六人、女子学生二一人、平均年齢二二・〇歳）、同大学の外国人留学生三七人（男子学生一五人、女子学生二二人、平均年齢二三・三六歳）を対象に質問紙調査を行った。留学生の日本滞在期間は、二ヶ月〜六年（平均一年二ヶ月）、留学生の国籍の内訳は、アメリカ三人、イギリス二人、イタリア二人、インドネシア二人、ウクライナ一人、ウズベキスタン一人、エルサルバトル一人、オーストラリア一人、カナダ一人、韓国二人、キルギス一人、スイス一人、スペイン四人、セルビア一人、タイ一人、台湾二人、中国三人（うち香港一人）、チリ一人、ドイツ一人、トルコ一人、フランス一人、ブルガリア一人、ロシア三人（五十音順）であった。質問紙は四設問からなっており、設問1は、片桐（二〇〇二）で使用されたイメージ評定尺度の五項目からなり、各項目につき、それぞれどのくらいあてはまっていると思うかを五段階評定させた。設問2では、日本人の特徴だと思う点を三つ記入させた。設問三では、日本人の長所だと思う点を三つ、設問四では、日本人の短所だと思う点を三つ記入させた。

その結果、五項目のイメージ評定のうち、「個性的」（$t=2.44$, $p<.05$）、「威張る」（$t=2.98$, $p<.01$）において、留学生の方が日本人自身の評定より、得点が有意に高いことが示された。「信頼できる」（$t=-1.08$, $p>.05$）「親しみやすい」（$t=0.57$, $p>.05$）「けち」（$t=-1.46$, $p>.05$）では有意差はなかった。留学生による日本人の「威張る」というイメージ得点が高かった点は、片桐（二〇〇二）における中国人による評定結果と一致しており、外集団全般の日本人イメージである可能性を示唆しており、興味深い。設問2、3、4については、コーディングカテゴリーを作成し、そのカテゴリーに基づき、調査者と別のコーディング者が独立に、記述内容を分類したところ、分類判定が九〇％以上一致することが確認され、不一致の部分は話し合いで分類判定を行った。

その結果、日本人の特徴として、「勤勉、まじめ」が、日本人（一三・五一％）よりも留学生（四三・二四％）の方が言及する割合が有意に高く（$\chi^2(1, N=74)=8.05, p<.01$）、「和、調和、一致」については、留学生（八・一〇％）よりも日本人（五一・五三％）の方が言及する割合が有意に高かった（$\chi^2(1,N=74)=16.56, p<.01$）。興味深いことに、「個人的」と言及した日本人（〇・〇〇％）はいなかったが、言及する留学生（一三・五一％）が有意に高い割合でいた（$\chi^2(1,N=74)=5.36, p<.05$）。なお、有意差のみられなかった記述カテゴリーは、「几帳面、正確」（日本人一〇・八一％、留学生二・七〇％、$\chi^2(1,N=74)=1.93$）、「礼儀正しい」（日本人一〇・八一％、留学生一三・五一％、$\chi^2(1,N=74)=0.13$）、「親切、気を配る」（日本人一三・五一％、留学生一〇・八一％、$\chi^2(1,N=74)=0.56$）、「恥ずかしがりや」（日本人二七・〇二％、留学生四三・二四％、$\chi^2(1,N=74)=0.70$）、「あいまい、遠まわし」（日本人八・一〇％、留学生八・一〇％、$\chi^2(1,N=74)=0.00$）、「建前、表面的」（日本人一六・二一％、留学生一八・九一％、$\chi^2(1,N=74)=0.09$）、「保守的、排他的」（日本人一〇・八一％、留学生五・四〇％、$\chi^2(1,N=74)=0.73$）、「冷たい」（日本人〇・〇〇％、留学生八・一〇％、$\chi^2(1,N=74)=3.13$）、「静か、落ち着いている」（日本人一三・五一％、留学生二・七〇％、$\chi^2(1,N=74)=2.90$）、「時間を守る」（日本人〇・〇〇％、留学生八・一〇％、$\chi^2(1, N=74)=3.13$）、「外見、流行に関する発言」（日本人二七・〇二％、留学生一三・五一％、$\chi^2(1,N=74)=2.09$）であった。日本人の特徴に関する認識において、日本人と留学生の間で、若干差異もみられるが、比較的一致していることがうかがえる。

次に、日本人の長所として、「和、調和」は、留学生（二・七％）より日本人（二九・七二％）で有意に多く言及され（$\chi^2(1,N=74)=9.95, p<.01$）、「信頼できる」は、日本人（〇・〇〇％）は言及しなかったものの留学生（二四・三二％）が言及する割合が高かった（$\chi^2(1,N=74)=10.25, p<.01$）。また、「外見、容姿に関する発言」の割合が、日本人（二・七％）よりも留学生（一六・二一％）で有意に高かった（$\chi^2(1,N=74)=3.95, p<.05$）。なお、有意差のみられなかった記述カテゴリーは、「真面目、勤勉」（日本人四五・九四％、留学生四五・九四％、$\chi^2(1,N=74)=0.00$）、「正確、丁寧」（日本人八・一〇％、留学生五・四〇％、$\chi^2(1,N=74)=0.21$）、「礼儀正しい」（日本人一八・九一％、留学生二一・六二％、$\chi^2(1,N=74)=0.08$）、「親切、気を配る」（日本人六二・一六％、留学生四〇・五四％、$\chi^2(1, N=74)=3.46$）、「謙虚」（日本人一三・五一％、留学生五・四〇％、$\chi^2(1,N=74)=1.42$）、「尊敬、敬意」（日本人五・四〇％、留学生一〇・八一％、$\chi^2(1,N=74)=0.73$）、「誠実、責任感」（日本人二・七〇％、留学生一三・五一％、$\chi^2(1,N=74)=2.90$）、「時間を守る」（日本人一三・五一％、留学生一〇・八一％、$\chi^2(1,N=74)=0.13$）であった。長所についても、日本人と留学生の間で、若干差異もみられるが、比較的共通した認識を有していることがわかる。

最後に、日本人の短所として、「本音を言わない」は、日本人（二四・三二％）よりも留学生（五一・三五％）で有意に多く言及されたが（$\chi^2(1,N=74)=4.72, p<.05$）、「主張がない、個性がない」は、留学生（五・四〇％）よりも日本人（三七・八三％）の言及する割合が有意に高かった（$\chi^2(1,N=74)=10.12, p<.01$）。「自信がない」、「他人の目を気にする」は、留学生は誰も言及しなかったが（ともに〇・〇〇％）、日本人（順に一〇・八一％、二四・三二％）では言及されていた（$\chi^2(1,N=74)=4.23, p<.05$）（$\chi^2(1,N=74)=10.25, p<.01$）。「排他的」は、日本人（八・一〇

%）より、留学生（三七・八三％）の方が有意に多く言及した（$\chi^2(1,N=74)=9.24$, $p<.01$）。なお、有意差のみられなかった記述カテゴリーは、「まじめすぎる、働きすぎ」（日本人一〇・八一％、留学生二四・三二％、$\chi^2(1,N=74)=2.33$）、「内向的」（日本人二九・七二％、留学生一八・八一％、$\chi^2(1,N=74)=1.18$）、「自己中心的」（日本人八・一〇％、留学生一六・二一％、$\chi^2(1,N=74)=1.14$）、「無関心」（日本人一三・五一％、留学生二・七〇％、$\chi^2(1,N=74)=2.90$）、「社会的地位を意識しすぎ」（日本人〇・〇〇％、留学生八・一〇％、$\chi^2(1,N=74)=3.13$）、「融通がきかない」（日本人八・一〇％、留学生一〇・八一％、$\chi^2(1,N=74)=0.16$）、「創造力がない」（日本人八・一〇％、留学生〇・〇〇％、$\chi^2(1,N=74)=3.13$）であった。短所については、日本人と留学生の間で、半分以上の項目で差はなかったが、一部の項目で有意差がみられた。

留学生の国籍が多様で、しかも日本に一定期間以上滞在しているため、日本に来たことがない外国人のイメージと必ずしも一致しないかもしれないが、日本人自身による日本人のイメージと、留学生による日本人イメージに、共通する部分も多いが、明確に差が表れた部分がある点は注目してよいだろう。ただし、結果で示された日本人と留学生によるイメージの違いのすべてが、日本人イメージの違いともいいきれない点は留意する必要がある。たとえば、「排他的」というイメージは、内集団内でよりも、外集団のメンバーが感じやすい点であり、自分が所属しない外集団のイメージ評定の際には、自分が属する内集団のイメージ評定より高く評定する可能性が考えられるからである。

おそらく、この調査結果が示唆する重要な点は、自分（自分たち）がとらえている自分（自分たち）と他者（他の人たち）がとらえる自分（自分たち）には必ずずれがあり、異文化間、異集団間の交流の際のみならず、通常の人間関係においても、他者（他の人たち）と接する際には、〝互いに違う〟という認識のみならず、〝お互いに相手に対して持つイメージは自己（自分たち）イメージと必ずずれがある〟との認識をもつ必要があるという点ではないかと思われる。

この調査は日本人と日本人以外の比較調査であったが、以下では、同じアジア圏といわれる、日本と中国の比較調査の結果の詳細と日本とベトナム間の比較調査の結果の概要について順に紹介する。

日本と中国の学生間での、大金を手にしたときの使い道の違いに関する調査では[8]、日本の首都圏に住む日本人大学生五〇人（男子学生二〇人、女子学生三〇人、平均年齢二〇・八歳）と中国人留学生四〇人（男子学生一六人、女子学生二四人、平均年齢二三・六歳：日本の滞在期間は半年未満、大方三カ月未満）を対象に、「今、あなたが一億円（中国では一万元）を手にしたとします。もしそれを自由に使ってよいとしたら、あなたはどのように使いますか。一〇分以内で自由にお書きください」とお金の使い方を問う自由記述の質問紙調査を行った。分析の際、コーディングカテゴリーを作成し、そのカテゴリーに基づき、調査者と別のコーディング者が独立に、日中それぞれ一〇人ずつの記述内容を分類したところ、判定が九六％以上一致することが確認され、不一致の部分は話し合いで分類判定を行った。残りのデータについては調査者が分類した。その結果、「貯金をする」という記述が日本で有意に大きな割合を

占めていた（日本八〇％、中国二五％、$\chi^2(1, N=90)=27.2, p<.01$）。日本人学生の八割が貯金と答えた点は注目に値する。一方、投資等により「財産を増やす」という記述は中国人留学生の方が有意に多く記述していた（日本二〇％、中国四三％、$\chi^2(1, N=90)=5.36, p<.05$）。また、日本人学生では、「買い物（形が残る）」（日本五四％、中国一八％、$\chi^2(1, N=90)=12.60, p<.01$）や「趣味（形が残らない）」（日本五八％、中国二五％、$\chi^2(1, N=90)=9.86, p<.01$）に言及する割合が中国人留学生よりも有意に高かった。誰のために使うかにおいて、「友人・所属集団のため」との記述があった割合は、日本人学生において有意に高かった（日本一二％、中国〇％、$\chi^2(1, N=90)=5.14, p<.05$）。なお、「学業」（日本一六％、中国三三％、$\chi^2(1, N=90)=3.38$）、「寄付」（日本二四％、中国一八％、$\chi^2(1, N=90)=0.56$）、「身の回り・生活」（日本二〇％、中国一〇％、$\chi^2(1, N=90)=1.69$）、「両親・兄弟姉妹プレゼント」（日本四〇％、中国三五％、$\chi^2(1, N=90)=0.24$）、「不動産」（日本一八％、中国二三％、$\chi^2(1, N=90)=0.28$）、「自分のため」（日本九六％、中国九五％、$\chi^2(1, N=90)=0.05$）、「家族のため」（日本四〇％、中国三五％、$\chi^2(1, N=90)=0.24$）、「その他の人のため」（日本二六％、中国二三％、$\chi^2(1, N=90)=0.15$）で国間の有意差はみられなかった。

国間以外で、若干性差が、各国内でみられた点は興味深い。日中それぞれにおいて、「趣味（形が残らない）」の記述する割合が、男子学生よりも女子学生において有意に高かった（日本―男子四〇％、女子七〇％、$\chi^2(1, N=50)=4.43, p<.05$）：中国―男子六％、女子三八％、$\chi^2(1, N=40)=5.00, p<.05$））。日本では、「財産を増やす」との記述の割合が、女子より男子のほうが有意に高かった（男子三五％、女子一〇％、$\chi^2(1, N=50)=4.69, p<.05$）。中国では、「両親・兄弟姉妹へのプレゼント」（男子一三％、女子五〇％、$\chi^2(1, N=40)=5.93, p<.05$））、「家族のために使用する」（男子一三％、女子五〇％、$\chi^2(1, N=40)=5.93, p<.05$））と記述する割合が、有意に女子のほうが高く、一方、「貯金する」との記述の割合は、女子より男子のほうが有意に高かった（男子四四％、女子一二％、$\chi^2(1, N=40)=5.00, p<.05$））。

短期間とはいえ日本に滞在している留学生であるため、中国国内に滞在し続けている中国人大学生と傾向が異なる可能性は考えられる。また、この課題は、お金に関する内容のため、このような語りや記述の結果には、文化的な価値観の違いのみならず、経済、社会システム、個人の経済状況の違いが反映される可能性が考えられる。このような調査の場合、できる限り個人的な経済状況の部分は対象者間でそろえるか、あるいは、経済状況による群分けをしたほうがよいかもしれない。今後、文化差を検討するうえで、経済、社会システムの違いも重要な要素として考慮していく必要がある。

次に、日本とベトナムの大学生における家族・友人関係と対人不安の関連に関する予備調査結果について概要のみ簡潔に紹介する[9]。この調査では、東京の一大学の学生一一〇人（男子学生二二人、女子学生八五人、平均二〇・〇歳）、ベトナム、ハノイの一大学の学生五四人（男子学生九人、女子学生四五人、平均二〇・〇歳）を対象に、家族機能尺度（Olson, McCabbin, Larsen, Muxen,& Wilson, 1985; 草田・岡堂、一九九三）、友人関係尺度（岡田、一九九五）、対人不安尺度（平石、一九九〇）と家族や友人との関係性を問う質問（家族の人数、家族との会話時間、友人との会話時間、自宅への友人招待頻度）からなる質問紙調査を行っ

た。その結果、家族機能尺度の「凝集性」と「適応性」、「家族や友人との会話時間」、「友人の招待頻度」において、ベトナム人学生のほうが有意に日本人学生より高いこと、日本においてのみ、友人関係尺度における「ふれあい回避」、「群れ」評定が対人不安尺度の「自己閉鎖性」と有意な正の相関関係が示されていたという。データ採集地域が限定的で、両国とも女性のデータ数が圧倒的に多く、他改良すべき点もあるが、同じアジア圏とはいっても、日本人とベトナム人の間で、人間関係の築き方、距離の取り方に違いがある可能性が示唆されている点は興味深い。今後さらなる追究が必要であろう。

おわりに

本論文では、筆者が関わった研究を中心に、少数の知見を詳しく紹介してきたが、これらの知見からのみでも、「西洋 vs 東洋」という二分法的な視点からは、各文化は説明しきれないことがよくわかる。今回紹介したデータにおける、いわゆる〝西洋文化圏〟はほぼ米国のみであるため、〝西洋文化圏〟内の多様性は、本論文内では説明することができなかったが、同じ〝東洋文化圏〟とされる日本と中国の間で、複数の調査結果を通じて、共通する点もあるものの、異なる点も多いことが示された。ただし、文化差の調査結果を解釈する上で以下の点に留意する必要がある。第一に、質問内容、課題内容、状況によって、文化差の現れ方は異なるという点である。先に紹介した「二十の私」テストでも、特定の場面や状況を設定すると、結果の出方が変わってくることが知られている（増田・山岸、二〇一〇他）。第二に、あくまでも、調査した各文化圏を代表する、サンプル群の傾向における差であり、各文化圏データ内で個人差はもちろんあるし、各文化圏を代表するデータに忠実にその文化の特徴が反映されているとは限らないという点である。第三に、文化圏間の差ほどではないとしても、性差、世代差、地域差なども存在するという点である。前述のとおり、上記で紹介したデータの一部で、性差が報告されている。今回、紹介しなかったが、上原・東（二〇〇七）では、同じ物語課題を、日本と中国の学生世代、親世代を対象に実施し分析した結果、世代差や性差がみとめられた。一部を紹介すると、中国の親世代が他よりも有意に「成功者」因子を重視し、「近親者との関係」因子は日中いずれにおいても親世代が学生世代よりも有意に重視していること、「成功者」因子、「プロフィール・履歴書」因子とも、男性よりも女性が有意に重視することが示された。クイズや仕事を三人グループで行い報酬を得たときを想定させ、どのように報酬を分配するのがよいかを、日本と中国の学生世代、親世代を対象に検討した、Mukaida & Azuma（2006）では、全体的には、日本のほうが平等分配（三等分）を評価する傾向が強く、日中とも、クイズ場面より仕事場面で公平分配（貢献度に応じた分配）のほうがよいとする傾向が強いものの、日本でのみ顕著な世代差（親世代が学生世代よりも、平等分配を有意に強く好む傾向）が示された。調べる内容によっては、同一文化圏内の地域差も存在することが指摘されている。柿沼、上村らの研究グループではこれまで、母親に絵カード（四種類）を用いて子どもに話をするように指示し、母子間での語りの様子

を、文化圏間（日本・中国・米国）、同一文化圏内（山形・沖縄・東京）で比較検討してきているが、語りのスタイルに、文化圏間ほどではないとしながら、山形、沖縄、東京の間にも差がみられることを示している（上村・柿沼、二〇〇六）。また、唐澤・林・松本・向田・トビン・朱（二〇〇七）では、日本、中国、米国における教育学・発達心理学の学生を対象に、幼稚園で学ぶのに大切なこと、幼稚園・保育園の必要性などに関して、項目を用意し各設問で三項目選択させるという課題を一九八九年と二〇〇三年に行った結果を比較しているが、文化圏間の差はもちろん各年でみられるが、一九八九年と二〇〇三年の間の同じ文化圏内での変化も日本、中国、米国のすべてで示されている。いずれにせよ、文化差の調査結果を解釈していく際には、性差や世代差、地域差などの他の諸要因も十分考慮し、慎重に結論を導いていかなければならないだろう。

今回焦点をおいた、語りに表れる差と文化差について少し考えたい。心理・行動に関する文化的差異については、ライフ・スクリプトの差としてとらえようとする立場をとっていることは先に述べた。子どもが周囲の出来事や行動の意味を理解できるようになる発達過程において、スキーマやスクリプトによる知識構造の構築が必須であると広く考えられている。スキーマは関連する知識の塊、スクリプトは物事の順序、筋道を含む、物語的知識のことである。例えば、レストランスクリプトとは、席に案内される、メニューを受け取る、注文をする、注文したものがくる・・・といった一連の流れをなす、レストランに関わる物語的知識である。発達の過程で、こういったスクリプトを積み重ねていくことにより、子どもはその社会でどのように物事が進んでいくのか、このようなときにはどういったふるまいがあり得るのかを学び、社会生活のさまざまな場面で、その場面に適した、行動、判断、推測ができるようになっていくと考えられる。「語り」とは、いくら短いとしても、また書き言葉であろうと、話し言葉であろうと、相手を想定し相手に伝えるために行うものであり、一種の起承転結をなすような物語表現になるため、過去自分が蓄積してきたスクリプトに基づいてなされる。例えば、自己紹介をするときは、その聴衆に覚えてもらえそうな、あるいは、皆に好感を持ってもらえそうな、話をしようと思うだろうが、そのときに、どういう話をすれば皆の興味をひきつけるか、自己紹介といったときに通常どういったことを皆、知りたいと思っているかといった、その社会で機能しているスクリプトに基づいて語るだろう。そのスクリプトに基づいて表出される語りには、まさに、その社会・文化で通用している考え方や特徴が反映されやすいと考えられる。

今回、紹介した研究データにおいて、文化圏間での語りの差が存在することが示され、その背景には、スクリプトの分布や内容の差が推測される。特に、複数の知見で対象となっていた、日本、中国、米国間で、（表出する、もしくは、こうであるとよいと想定する）語りに、互いに共通性や差があることはよくわかったが、見出される共通性や差は課題内容によっても異なるため、（今回紹介しなかった）他知見とあわせて検討しても、その背景にあるスクリプトがどう異なるのかまでは、簡単には特徴づけられそうにない。もう少し多くの知見を積み重ねていく必要があるだろう。とはいえ、自己紹介データ、一〇年後の自分、物語の人物を語る上で重要な情報、また従来から知られている

「二〇の私」に関する調査で共通して、日本のデータでは、趣味、役割、所属、仕事名（具体的な内容ではない）などの日本の履歴書でよく記述するような内容が含まれており、このような内容が、公の場面で人について語るときに、日本で起動されやすいスクリプトの一部を成している可能性が考えられる。今後、他の課題でもこの点追究できたらと考える。

最後に、文化差を検討する調査を実施することの意義について触れておきたい。理論との関係性が明確ではないデータの公表に批判もありうるだろうが、まだ文化的事象に誤解の多い世間に、理論的な裏付けのない、実証的な知見を公表することにも意義はあると思われる。意外な側面を伝えたり、誤解を解くようなきかっけにもなりうるからである。文化的事象の場合、不確かな状況で無理な解釈をするより、地道により客観的なデータを積み重ねていく作業が必要ではないかと思われる。文化差の研究は、自分が属する文化圏のスクリプトと、自分とは異なる文化圏の異なる文化的スクリプトを学ぶことにとどまらず、自分とは異なる他者への理解と受容について考えるきっかけを与えてくれるのではないかと思われる。

注

1 林千尋氏の平成二三年度の卒論研究

2 ブラジル人学生は、ブラジルの大都市圏からオーストラリアに語学留学してきたばかりの学生とブラジル国内の大都市圏で大学に通う学生のいずれかであった。

3 日中米で、どれか一つの国、あるいは二つの国のデータにおいてのみ三分の二以上の対象者が3もしくは1と評定している項目をあらかじめ除外した。

4 日本の大学生は，東京都内の四つの男女共学の大学、一つの女子大学、もしくは、長野県内の一つの男女共学の大学のいずれかに所属していた。中国の大学生の所属は、北京近郊の二つの男女共学の大学のいずれかであった。米国の大学生の所属はワシントンD.C.郊外の1つの大学とオハイオ州の一つの大学のいずれかであった。

5 中国のデータでは、因子負荷〇・三三以上で，かつ二因子にまたがって〇・三三以上の負荷を示さない一三項目を抽出した。日米より対象者数が少ないため、今後、データを追加し再分析を行う必要があると考える。

6 日本人大学生は都内の一つの大学に所属し、米国人大学生はオハイオ州の一つの大学に所属していた。なお、日本での調査協力者数は一五六人であったが、文化差の調査であるため、海外居住経験が六カ月以上（六カ月は一人のみ、大方数年以上であった）の日本人学生と留学生の計二九人のデータは含めなかった。

7 宮下知氏の平成二〇年度の卒論研究

8 新里紹太氏の平成二〇年度の卒論研究

9 合田千寿氏の平成一八年度の卒論研究

引用文献

東　洋（二〇〇三）．日米比較研究ノート――文化心理学と異文化間比較――．発達研究、十七、107―113頁．

Azuma, H. (2006). *The Era of Fluid Culture: Conceptual Implications for Cultural Psychology.* In Q.Jing, M.R. Rosenzweig, G.d'Ydewalle, H.Zhang, H.C.Chen,

& K.Zhang (Eds.), *Progress in psychological science around the world.* Vol.2 New York, NY: Psychology Press. Pp.305-318.

東　洋　（二〇〇七）．　序にかえて．　平成一七年度～平成一八年度科学研究補助金［基盤研究（B）］研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因：国際比較と国内変動の総合的研究」、1―3頁．

Bond, M. H., & Cheung, T. (1983). *College students' spontaneous self-concept. Journal of Cross-Cultural Psychology*, 14, Pp.153-171.

Bruner, J.S. (1990). *Acts of meaning.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

平石賢二　（一九九〇）．　青年期における自己意識の構造―自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康―．　教育心理学研究、三八、320―329頁．

唐澤真弓・林安希子・松本朋子・向田久美子・トビンジョセフ・朱瑛（二〇〇七）．　幼児教育の文化的意味――日本、アメリカ、中国における文化間および文化内比較――　平成一七年度～平成一八年度科学研究補助金［基盤研究（B）］研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因：国際比較と国内変動の総合的研究」、35―44頁．

片桐雅義　（二〇〇二）．　日本人のイメージ――日中大学生の比較――．　宇都宮大学国政学部研究論集、一四、1―8頁．

草田寿子・岡堂哲雄　（一九九三）．　家族関係査定法．　岡堂哲雄（編）心理検査学　垣内出版、573―581頁．

増田貴彦・山岸俊男　（二〇一〇）．　心理学の世界専門編　文化心理学（上）培風館．

Mukaida, K., & Azuma, H. (2006). *Rule use in reward allocation in China and Japan.* 平成一四年度～平成一六年度科学研究補助金［基盤研究（B）］研究成果報告書「行為の理解、推測、評価の認知的枠組みとしての文化的スクリプト」、55―62頁．

向田久美子・東洋　（二〇〇七）．　自由作文に見る一〇年度の将来――日中米比較――．　平成一七年度～平成一八年度科学研究補助金［基盤研究（B）］研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因：国際比較と国内変動の総合的研究」、13―23頁．

Mukaida, K., Azuma, H., Crane, L.S., & Crystal, D.S. (2010). *Cultural scripts in narratives about future life: comparisons among Japanese, Chinese and American Students.* パーソナリティ研究、一九、Pp.107-121.

岡田　努　（一九九五）．　現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察．　教育心理学研究、四三、354―363頁．

Olson, D. H., McCabbin, H. I., Larsen, A., Muxen, M., & Wilson, M. (1985). *Family Inventries.* St. Paul, MN: *Family Social Science, University of Minnesota.*

高野陽太郎・纓坂英子　（一九九七）．〝日本人の集団主義〟と〝アメリカ人の個人主義〟――通説の再検討．　心理学研究、六八、312―327頁．

高崎文子・東洋　（二〇〇七）．　「努力したこと」についての回想的記述の分析：日米中比較．　発達研究、二一、1―10頁．

Triandis, H.C., McCusker, C., & Hui, C. H. (1990). *Multimethod probes of individualism and collectivism. Journal of Personality and Social Psychology*, 59, Pp.1006-1020.

上原泉・東洋（二〇〇五）．物語作成の際に重視する項目は何か――日中比較の中間報告――．発達研究、一九、55―64頁．

上原泉・東洋（二〇〇七）．日本・中国・米国の学生が重視する主人公の特徴・発達研究、二一、55―68頁．

上原泉・東洋（二〇〇七）．主人公について重視する項目の日中比較――性差、世代差の検討――．平成一七年度～平成一八年度科学研究補助金［基盤研究（B）］研究成果報告書「行為の記述・推測・判断における文化的要因：国際比較と国内変動の総合的研究」、4―12頁．

上村佳世子・柿沼美紀（二〇〇六）・文化的学習の場面としての母子の語り（二）――東京・山形・沖縄における社会的相互行為――．発達研究、二〇、23―32頁．
山本登志哉（二〇〇八）．お小遣いから見えてくる親子・友達関係発達の文化性――日韓中越国際共同研究から（特集 東アジア文化の心理学）．心理学ワールド、四〇、5―8頁．